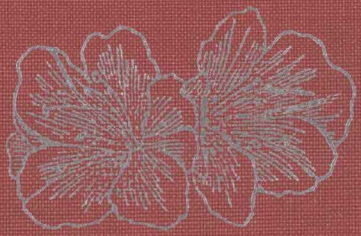

吉屋信子全集 8

徳川の夫人たち（正・続）

朝日新聞社

吉屋信子全集 8
徳川の夫人たち（正・続）
定価　二七〇〇円
昭和五十年十月十五日発行
著者　吉屋信子
装幀者　中島かほる
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　清美堂製本株式会社
発行所　朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

©1975 C. YOSHIYA 0393-240188-0042

第八巻　目次

徳川の夫人たち　3
続　徳川の夫人たち　277
あとがき　545
付　江戸城大奥之図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

徳川の夫人たち

昭和四十一年一月四日――十月二十四日「朝日新聞」

目次

ぷろろーぐ　7
魅惑者　9
変身　32
心象風景　53
異端者　80
黙示録　115
自偽者他偽者　158
狭き門　199
輪廻　238

ぷろろーぐ

この国が太平洋戦を敗北で終った一九四五年以後、皇室と皇族四家以外の貴族階級はみな廃された。そのなかに、かつて江戸時代この国の政権を握り世襲十五代の三百年に渡った徳川将軍の子孫の公爵家もあった。

東京芝公園三号地の増上寺内には徳川家六人の将軍とその夫人、子女、側室の墓所と霊廟が置かれ、墓所十二基は重要文化財に、霊廟の建築は国宝に指定されていたが、太平洋戦中、空襲下に焼滅した。

一九五八年（昭和三十三年）徳川家正氏はこの増上寺の墓地六万平方メートルを西武鉄道に売却後、墓所を一カ所にまとめる改葬許可願を文化財保護委員会に提出、同委員会は墓地を掘り起す際の学術的調査を要望した。

同年八月三日から考古学、人類学の大学教授たち参加のもとに発掘が開始された。

最初に二代将軍秀忠（寛永九年逝去）の墓を発掘すると地下二・七メートルの石室内に置かれたかつぎ輿の中の座棺は押し潰されていたが、肉片の附着した骨と毛髪、爪が残り、副葬品の葵の紋章の付いた槍と火縄銃が発見された。遺体調査では、「背は低いが骨の太さから戦国時代を父家康と共に過した武士の体格」と報じられた。

次に六代目家宣の墓所が発掘されると、銅製の棺に二重に納めてあった。この将軍は屍蠟（ミイラとの中間）となって衣冠束帯の正装の姿が完全に保たれていた。二代将軍とちがって骨格は華奢で、鼻高く面長の典雅な容貌だった。江戸時代の庶民がたいてい丸顔で反歯で鼻が低かったのにくらべると高貴な相で、しかも現代的美男型だと東大人類学教室の研究報告だった。

翌年一月、十二代家慶の墓発掘。銅棺中の木棺は浸水して防腐剤の朱粉が溶けて、ミイラ化した遺体は朱に染まっていた。これもいわゆる（大名顔）の貴族の容貌だった。五十一歳の六代家宣とこの六十一歳の家慶と共通して歯がティーンエージャーの歯のような若さを保っていたのは、将軍の食事が柔かに調理されていたと推理された。

同月二十九日。十四代家茂夫人静寛院宮の棺が掘り出された。将軍たちとちがって銅で覆われぬ檜の寝棺は泥に埋もり白骨化して形をとどめず、夫人に先立ち二十一歳で逝った良人家茂の硝子板写真が発見されただけだった。

その家茂将軍の銅棺と木棺三重の棺内白骨は完全な形だった。副葬品には幕末の外国品銀側時計と水銀寒暖計と六十センチの女性の毛髪だった。髪の毛は未亡人静寛院宮のものと推定された。

同年三月発掘の九代将軍家重の遺体の保存状況は良好でミイラ化、葵の蒔絵の手箱も現われた。

最後に発掘の、僅かに八歳で逝去の七代将軍家継の銅に覆われた木棺内には遺体消滅して、飾太刀二振だけ残っていた。

――この徳川家墓所発掘跡には現在高層なホテルの建物がそびえている。

〈一五九八年（慶長三年）八月、太閤様は臨終に、六歳の世子秀頼に天下を譲らんがため、彼の面前にて徳川家康たち五人の大老職に行わせた厳粛な宣誓によって遺言の実現を期した〉

以下〈　〉括弧内は、フランスのレオン・パジェス（Léon Pagès）の日本に関する著述の訳語（吉田小五郎氏訳、日本切支丹宗門史の抜萃点綴）

〈一六〇三年（慶長八年）一月、太閤の遺児十一歳の秀頼様は、内府様（家康）の息子の女、即ち孫娘（千姫）と結婚した。内府様は絶えずその家系の永続を計り機会あるたびに政略結婚によって有力な諸大名と提携した〉とも述べている。

家康はやがて秀吉との宣誓を裏切ってこの国を僭奪し、永遠にわが家族に伝えたい意志を表明し、征夷大将軍の称号を朝廷に乞うて、世子秀忠を後継者に定めた。この父子二人は共同して国内の平和と和協を維持して新しき家系（徳川）の永続の保証を望んだ。

一六〇九年（慶長十四年）フィリピンの副総督ドン・ロドリゴはメキシコに航海中、日本沿岸で難破し、陸上に避難した機会に彼は駿府城で六十八歳の大御所（家康）に謁見した。

〈中背で肥満し、風貌に犯すべからざるところと情味があった〉印象を受けた彼はつづいて江戸城で二代将軍秀忠に謁した。

〈顔は褐色を帯びているが上品で立派な風貌だった。彼の居城は壮麗で善美をつくした装飾が施されてある。城内には二万余の者が仕えていた〉というドン・ロドリゴの見聞だった。

〈狡猾なる家康は故太閤の遺児秀頼から事を起させるために偶像大仏殿の鐘を鋳せ〉とパジェスの書いたように、慶長十九年（一六一四）その鐘銘の「国家安康」が、彼の名を切断した呪詛と難じて、大坂城を攻め翌年の五月に、大坂城の燃ゆる炎のなかに秀頼母子を滅亡させ、孫娘の千姫だけは救出した。天下の権力は徳川家に帰した。

〈一六一六年（元和二年）一月、家康は老齢で猟（鷹狩）に興じ疲れて病み、彼は日本の絶対にして安固たる領地を後継者に残して駿河の城で死去した。二代将軍秀忠は父の栄誉のために壮麗なる殿堂を父の墓所に宛てた。この殿堂は江戸から三日路の日光山上に建てられた〉

〈一六二三年（元和九年）に、秀忠の世子家光を朝廷は将

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

軍に補し給うた。新将軍は臣下の大名全部の家族を江戸に居住せしめて（人質）の手段により、主権を増大確立させ、諸侯の権力と財力を弱め独立の希望を失わしめようと計った。また切支丹宗を将軍の尊厳を損なうものとして禁じ、違犯者を死刑に処した〉

この参覲交代制と切支丹禁止、そのほかに新将軍の乳母春日局が確立した将軍と典医以外、男子禁制の「大奥法度」による江戸城内の女性だけの別天地大奥は異邦人バジェスのいささかも知り得ぬところだった。

魅惑者

大猷院殿（家光）御実紀の寛永十七年（一六四〇）五月十一日の項に〈伊勢慶光院、大病により、医員高木玄済正長をつかはさる〉とある。

この慶光院とは伊勢度会郡宇治の郷（現伊勢市宇治浦田町）の尼僧開基の臨済宗比丘尼寺である。院主は准尼門跡の扱いで紫衣着用を許され、やがて上人称の資格を与えられるのが例だった。

この尼院の遠祖は後醍醐天皇の皇女祥子内親王である。内親王は伊勢神宮の斎王であられたが、元弘の乱で父の帝が笠置山に遷幸された時に内親王も尼僧となられ庵を結ばれたのがこの寺院の由緒だった。

慶光院と称してからの初代院主守悦上人は京都の公卿飛鳥井家の息女である。二代の智珪尼も堂上出だった。代々の院主たちは「慶光院さま」と寺号で呼ばれ、やがて上人称を禁裡から勅許される。寺院内では院主は「御前さま」と称されてあまたの尼僧に最上にうやまわれるのだった。

豊臣秀吉は逝去前の慶長二年（一五九七）に莫大の寄進

をして、それまでの慶光院の建物を一新、壮大華麗に建立させた。本尊の釈迦牟尼如来の仏殿、客殿、庫裡、方丈、総門。敷地二千五百坪に建坪五百三十一坪半であった。

徳川幕府に世は移っても、家康、秀忠からも寄進を受けて厚遇され、院主の江戸参府の道中は御朱印（公用）の伝馬人足を駅々で与えられた。

三代家光からは寛永五年に江戸城傍の代官町に院主参府の宿泊用の屋敷を拝領した。これは五代院主周清上人がすぐれた辣腕家で家光の乳母春日局に巧みに接近、親しかったにもよる。

周清尼は六年前に後進に道を譲る形で隠居。お付弟（法嗣）の周宝尼を六代目院主に立てた。新院主は病身で実権は隠居周清尼に握られていた。その虚弱な周宝尼がこの春から臥床、とうてい恢復の見込なしと診断された。

そのため彼女を引退させて次の七代院主を急ぎ定めることになった。その選定は隠居の周清に一任された。彼女の目算には二人の院主候補者があった。禅宗一派の臨済宗のこの尼寺には、喝食立が当時二人あった。（喝食立）とはまだ剃髪せずに、下げ髪を肩の辺で切り太い元結で結び、縫模様の振袖を着て、さながら寺小姓のような姿で院主に仕え、尼門跡の教養としつけを受ける将来の法嗣候補生だった。

その一人は内宮権官の娘で周清尼の血縁に当る。もう一人は宮廷の参議六条有純の息女だった。

周清上人が禁裡に参内した折に六条有純卿から、彼の息女が母を失ったのを動機に比丘尼寺で仏に仕えたいのぞみで困っていると告げられた。「それほどに申さるるなら、ひとまずこなたでお預りいたしましょう」と万事に意力的な上人は引き受けて、その十三歳の息女に会うと、思わず息の詰るほどの美しさに驚かされた。

六条家の息女は公卿の間でも評判の姫だった。六歳でいろは歌をそらんじ、やがて古今集、源氏物語のなかの歌を暗誦するという天才少女でもあった。

父君も周囲もゆくゆくは宮廷の内侍司にも上げれば、やがては尚侍典侍にもと将来を卜していられた。けれども当人はただひとすじに「比丘尼寺へ」とのぞんでいる。

そのため父君も我を折って、慶光院に当人の気のすむまで預ってもらう約束で、周清尼に伴われて伊勢へくだって、尼僧院にもう足かけ五年も喝食立の姿のまま大切に扱われていた。病弱な周宝は学識は実務的な周清よりはるかにすぐれていた、そのひとから、文学は「源氏」や「伊勢物語」、歌道は「万葉」「古今」、漢学は「大学」「中庸」「論語」に「孟子」、仏教と禅学は「仏祖三教」「臨済録」「四部録」その他を吸い取るように学び、音曲は寺院でしばしば催す謡曲を傍聴して親しんだ。読経もみごとに見習って美しい凛とした声だった。

もういつ剃髪、法衣をつけても立派な若い比丘尼の資格

はととのっていたが、父の有純卿は一人娘をむざと黒髪をおろして尼僧にとはあまりにあわれで承引せられない。

一年にいちどほど、京へのぼって生家を訪れる六条家のこの息女の年ごとに美しい成長は、堂上の公達の眼をそばだたせてもいる。

そのひとを預る周清尼もこの息女はいずれ六条家に帰さねばならぬといままでは思っていたが、いま現在、にわかに七代院主を立てる場合、血縁の神宮権官の娘と公卿の息女を功利的に比較すると、まず身分に大きな差がある。

慶光院も初代二代とも堂上家の出身、この七代目あたりに、公卿の息女を入れるといま隆盛の尼院にさらに格式を添える。しかも世にもまれな美貌の院主をすえるのは対社会的に効果があると――周清尼にはこうした政治力があった。

准尼門跡比丘尼寺の院主相続は代々徳川将軍から命じられる形式の権力備わるものだった。その院主を継ぐとあれば、父の六条卿もさすがに否めず、また当の息女は一生を比丘尼でありたいと切に望んでいる。

周清上人の緻密な計画のもとに、六条有純の美しい息女の慶光院七世院主が実現されることになった。

寛永十七年（一六四〇）四月上旬、慶光院では七世院主の晋山式（一寺の住持となる儀式）が行われた。喝食立の姿から一転して剃髪、紫衣を身につけた若く美しい新院主が本堂に現われると、集る善男善女は讃嘆の声をもらして合掌した。その日の式に列した父君六条卿の眼には複雑な涙が湧く。

この儀式のあとのもう一つの行事は、徳川将軍に慶光院主相続の御礼に江戸へくだることだった。

あたかもその月、将軍は日光東照宮参拝に発府、二十三日帰城、その後に「慶光院参府ありたし」と幕府寺社奉行からのお達しだった。

慶光院七世新院主の江戸参府の一行は、その四月下旬に出立した。

尼僧院での長老尼僧の筆頭は（一老）という職名の執事役だった。次席が（二老）と、法名よりも一老さん二老さんと職名で呼ばれていた。その一老が若い新院主の後見に付き添った。二老は先発して江戸代官町の拝領屋敷に新院主一行の宿泊準備にすでに立っていた。

新院主の江戸への供まわりは、慶光院の非常勤務の家司たちと、山田奉行花房志摩守から幕府の命で道中守護に添えられた徒士数人だった。

院主は准尼門跡の格式の乗物、総黒漆に唐草の金蒔絵の駕籠、一老はお供駕籠。御朱印の公用旅行者の扱いで駅々で荷を乗せる伝馬も人足も無料で供給された。

伊勢から四日市、そこから江戸まで九十九里八丁の道程を本陣泊りを重ねてたどる。

新院主の尼君には初めてのながいこの旅は、京の生家か

ら伊勢の比丘尼寺にのみ籠ったまだ十七歳の彼女に、さまざまの風景と、そして現実の世相を眺める機会を与えた。

彼女が駕籠のなかから見たこの世に生きる人間の姿には――家とは名ばかりの屋根の傾いた小屋の前に髪振り乱して痩せこけた女が背に赤児をくくりつけて、僅かな土の上に鍬を動かしていた。背の児は力のないあわれな泣声を絶え絶えにつづけていた。痩せほおけたその母は乳も出ないにちがいない……。

田畑の道では、ちぎれた布子をまとうた村童たちが旅人の棄てた古草鞋を玩具にしてそれを投げ合って遊んでいる。その児たちの半裸の小さい身体は泥と垢とそしてできもので覆われていた。

ある宿駅では物売りの老いさらばえた老女が孫らしい小さい女の児の手を引きながら、籠をさげてとぼとぼとよろめくように歩くうち、つまずき転倒して籠が飛び、なかの小魚が水しぶきのように散乱して、折からさしかかった旅姿の武士の袴の裾をよごした。武士は老女を激しく蹴り上げた。孫らしい子は泣き叫んでいた。

慶光院新院主はこうした見聞を重ねるうちに仏法の衆生済度という人間の魂を救うより、一歩前に人間のいとなむ現実の生活そのものを救わねばならぬ。生活あっての魂であると考えずにはいられなかった。豪華な伽藍に多くの尼僧を養い、御所風のことばを用いての礼儀作法にとらわれる貴族生活のなかで、ただ仏への帰依だけで衆生を済度し涅槃に導くという慶光院のあり方に疑義を抱いてしまう。

――いにしえの光明皇后の悲田院、施薬院を忘れては尼僧院のあり方はないと、彼女は無邪気なほど一筋に思い詰めて、新院主の未来の夢を描いて若い胸をときめかせた。

日を重ねてその道中が江戸品川に入ったのは昼八ッ半（午後三時）、ここから代官町まで二里である。

品川から一路江戸の町に入った慶光院一行は、江戸城を囲む幾重の濠の外廓、帯曲輪へ七ッ半（午後五時）には差しかかった。

青葉の季節の夕空はまだ明るく、あかねさしたあたりにお城の天守閣が描いたように浮いて見える平河門と竹橋の土手に沿うて拝領屋敷に刻々に近付く。

慶光院江戸屋敷の日ごろはしんかんと閉ざされる黒木の冠木門が今日は開かれた。門内から表庭へかけて（林泉塵もとどめず）と掃ききよめてある。

慶光院の職名二老さんは、新院主付の侍女役になった十三歳の少女僧玲貞を伴って、すでに数日前にここに先着していた。

その両人もこの時刻には玄関にすわり込んで「今か今か」という気持で待ち受ける。拝領屋敷留守居役の家司たちも門に立った。

やがて、伊勢からの一行はその門に現われた。玄関式台に横づけの乗物から、新院主がすらりと嫋やかに抜け出た

姿に、一瞬そのあたりが灯ともしたように明るくなった感じだった。

白綸子の裾ながきにうす紫の被布姿、惜しみなく青々とそり上げられた円頂の端正な形が黒髪を誇る女よりさわやかに不思議に幽艶にさえ見える。

紅も白いものも刷かぬ、素顔のままにととのった眉目のすがすがしい清浄感に、ひときわ気品を添えるのは白象牙を名工の彫り上げたごとき鼻梁の線だった。

じぶんのこの美しさをまだ自覚せぬ彼女の稚純な態度がさらに感動を与える。

新院主を迎える奥の広間へ一老が案内に立つ長い畳廊下に、どこから忽然と現われたのか、真白な小猫が緋の首輪の鈴を鳴らして、美しい尼君のおすそにじゃれる。

「ここに、おちゃちゃがいるとは！」

尼君は驚きの声をあげて立ち止られた。

その白い小猫は、まだ新院主が喝食立の振袖のころから飼いならした愛猫だった。名はおちゃちゃと呼ばれたのが、飼主が院主に昇格「御前さま」と呼ばれるとともに猫も「おちゃちゃさま」と尼僧たちに呼ばれた。「ちゃちゃ」は淀君の幼名とあって尊称を付けたせいもある。

そのおちゃちゃが、新院主江戸参府に先立って二老と玲貞が旅立った日から慶光院から姿を消して、尼君をさびしがらせていた。

「玲貞が連れて来たと見える……」

尼君の推理は当っていた。桑名の駅路で玲貞は手品師のように駕籠のなかからおちゃちゃを取り出して見せて二老を驚かしたのである。彼女はかねて尼君の愛猫の飼育係だった。

「いまだに小尼は、野育ちの里の娘で困らせられます」

二老は玲貞をいつも小尼と呼ぶ。

小尼は宇治の村落の貧農の孤児だった。先住の慈悲で慶光院に養われて庫裡に立ち働きながら、尼僧になる日を望んでいた。色は黒く、くりくりと肥えてきて男の児のような振舞で、尼院の庭の柿の木によじのぼり柿をほおばり、庭中かけまわってトンボを追いかけたりで、隠居周清尼にはうとまれたが、新院主にはむしろ尼院内の愛嬌者と認められ、江戸参府直前に剃髪、玲貞の法名も授けられ、二老さんと江戸に向かう幸運を得たのだ。

その小尼が尼君の愛猫を人知れず連れ出して、江戸へ百里の道中をさせて来たとは……。

「いかにも小尼らしいこと」

尼君はおしかりもなく微笑まれて、久しぶりで江戸で会うおちゃちゃを抱き上げられた。

奥の間には香の匂いも漂い、早目に燭台も灯っている。二老さんが三島の夏茶碗に鶯色の泡をふくよかに泡立てたのを尼君に運んだ。

「おつかり（湯浴）をなされまして、おばん（夕食）を召し

上りませ」

やがて浴室へ二老さんは付き添ってゆく、そこに小尼が薄墨染の法衣の袖を背に結び上げてお背を流すためにひかえていた。

浴室の柱にかかる吊行灯のあかりが湯気にかすんでにじむなかに、尼君の裸身は譬えれば白い蓮華が露を浴びるようとでも言いたい玲瓏と滑らかなお背中を小尼は流しながら、

「一老さんはな、おくたぶれでまだお駕籠にゆられているようだとおっしゃります」

と、言葉だけは子供のころからの尼院しつけでわきまえている。

「西も東もわからぬこなたを守っての長旅、さぞかし気疲れ、よう休ませて、玲貞が背でももんで差し上げるがよい」

「はいッ」と――尼院中でのおてんば小尼も、この尼君には従順で忠勤無比だった。

「なぜおちゃちゃを連れて出ました」

「御前さまもお留守、この小尼も留守の間はおちゃちゃさまがさびしくてあわれで案じられました」

「それを言わずに、隠して連れて出たのは」

小尼の勝手な行動は新院主として訓戒の要がある。

「……上人様のお目にとまれば、おちゃちゃは連れては参れませぬ」

上人様の隠居の実権者周清尼が、小猫を江戸へ連れて行くことを許すはずはたしかになかった。

「道中さぞおちゃちゃは生きたお荷物で手がかかったであろうに」

尼君はあきれていられる。

「いいえ。おとなしいおちゃちゃさまであらしゃりました。本陣の宿で二老さんと小尼はお精進、おちゃちゃさまはいつもおとと（魚）で、あのようにまるまると肥えました」

尼君は笑声をたてられた。

その夜の拝領屋敷は新院主を迎えて、灯火にぎやかに華やいだ。その灯の下で一老は執事の役の「慶光院お日記」に旅硯の筆をとりながら、旅疲れで眠りこけてしまうのだった。

江戸に着いたあくる朝は五月雨だった。それも今日いちにちの休養にふさわしい。

「あすは晴れましょう。公方様にお目見えも、おするする（無事）とおすみのことと存じます」

一老も二老もその点は安心している。

「五摂家鷹司家より御入輿の御台所にもおめにかかりたいもの」

尼君はそれを望んでいられる。

「さあ……その儀はいかがなりましょうか、御台様は公方様とのお仲めでたからず、別御殿におすまいにて、中の丸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com